

笹鉾山古墳群

— 第1～5次発掘調査概報 —

田原本町教育委員会
2005

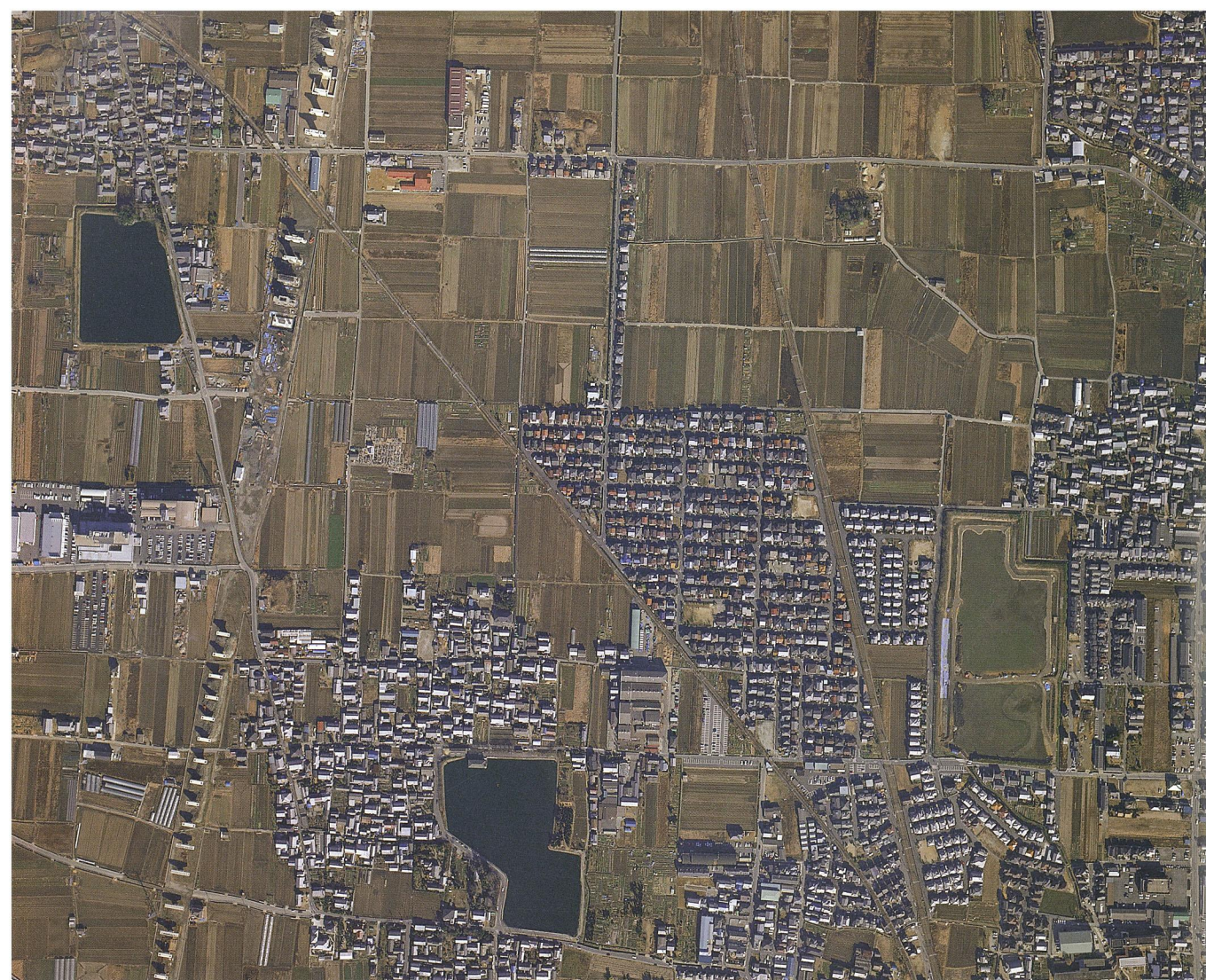


写真1 笹鉾山古墳群周辺の航空写真（写真上が北）

凡 例

1. 本書は、田原本町大字八尾に所在する笹鉾山1号墳・2号墳の発掘調査の概要報告である。
2. 本書に収録した発掘調査の成果は、第1次から第5次の発掘調査分である。既年報の各調査の調査区と遺構名称については、継続調査を実施しているため、本概報において変更した。今後、これを参考にされたい。
3. 本古墳の名称は、『大和国古墳墓取調書』（1893）に拠れば、「笹鉾山」と呼ばれていたことからこの名称を遺跡名とした。
4. 本書は、各調査担当分を藤田三郎・豆谷和之・清水琢哉、他は藤田が執筆し、櫻井拓馬の協力を得て、奥谷知日朗と藤田が編集した。

はじめに

笹鉾山1号墳は、田原本町大字八尾小字山本に所在する東向きの方後円墳である。奈良県遺跡地図⁽¹⁾では不確実な古墳としてマークされ、あまり注目されていなかった。しかし、平成6年2月、墳丘の西20mで用排水路整備があり、事前の発掘調査を実施したところ、本墳の周濠を確認するとともに新たな円墳1基(2号墳)を発見するに至った。1号墳は、発掘調査や墳丘測量の成果から、低地部では墳丘が残る数少ない方後円墳であることが判明した。このような経過を経て、町教育委員会では本墳の範囲を確認する発掘調査を計画し、現在継続的に実施している。

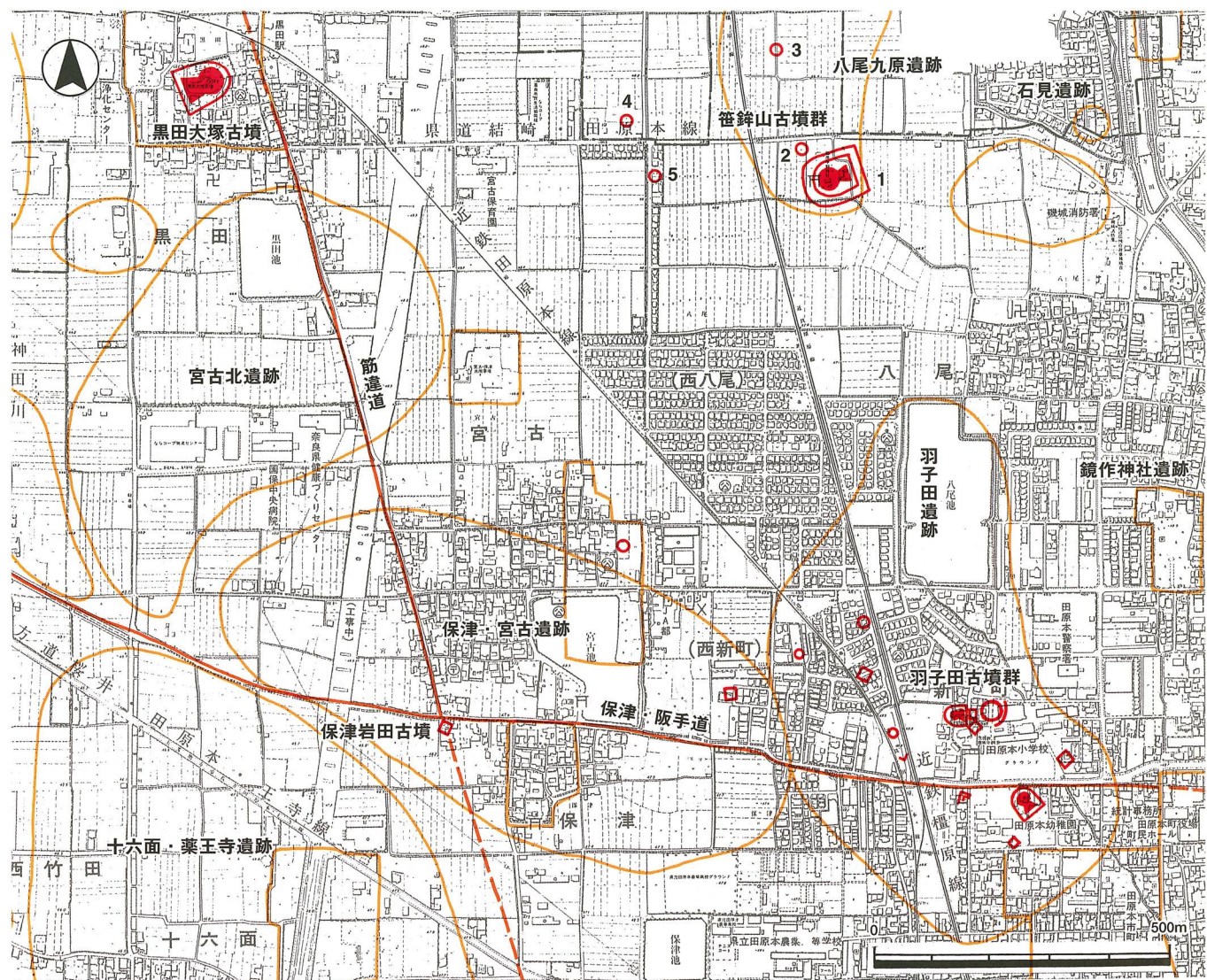


図1 笹鉾山古墳群周辺の遺跡分布図 (S = 1/10,000)

また、笹鉾山1号墳は、標高46mの沖積地に立地する古墳であるが、周辺にも削平古墳が埋没している可能性があったため、本古墳の北側で計画された農道整備に伴い、発掘調査を実施した。この調査では、弥生集落関係の遺構遺物と削平古墳1基を確認し、小字名から「八尾九原遺跡」とした⁽²⁾。このような成果から、本地域には削平古墳がかなり埋没していることが想定され、1号墳を盟主とする「笹鉾山古墳群」として認識するに至った。

この笹鉾山古墳群の周辺には、東300mに多数の形象埴輪や木製品が出土した石見遺跡⁽³⁾や古代の下ツ道、延喜式内社の鏡作神社、西900mに黒田大塚古墳⁽⁴⁾、筋違道や法楽寺、宮古北遺跡⁽⁵⁾が、南800mには羽子田古墳群⁽⁶⁾と保津・阪手道⁽⁷⁾がある。このように本地域は、古墳時代後期に相当数の古墳が築造されるとともに古代においても重要な地域であったと考えられる。

- (1) 奈良県立橿原考古学研究所編『改訂奈良県遺跡地図』第2分冊 1984
- (2) 田原本町教育委員会編「八尾九原遺跡第1次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報1996年度』1997
- (3) 末永雅雄「磯城郡三宅村石見出土埴輪報告」『奈良県史蹟名勝天然記念物調査報告』13 1935
奈良県立橿原考古学研究所附属博物館編「石見遺跡資料」『大和考古資料目録』第15集 1988
- (4) 田原本町教育委員会編「黒田大塚古墳第4次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報1996年度』1997
- (5) 奈良県立橿原考古学研究所編「保津・宮古遺跡第4次発掘調査報告」『奈良県文化財調査報告書』第59集 1997
- (6) 田原本町教育委員会編「羽子田遺跡第11次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報1997年度』1998
- (7) 田原本町教育委員会編「羽子田遺跡第16次調査」『田原本町埋蔵文化財調査年報1998年度』1999

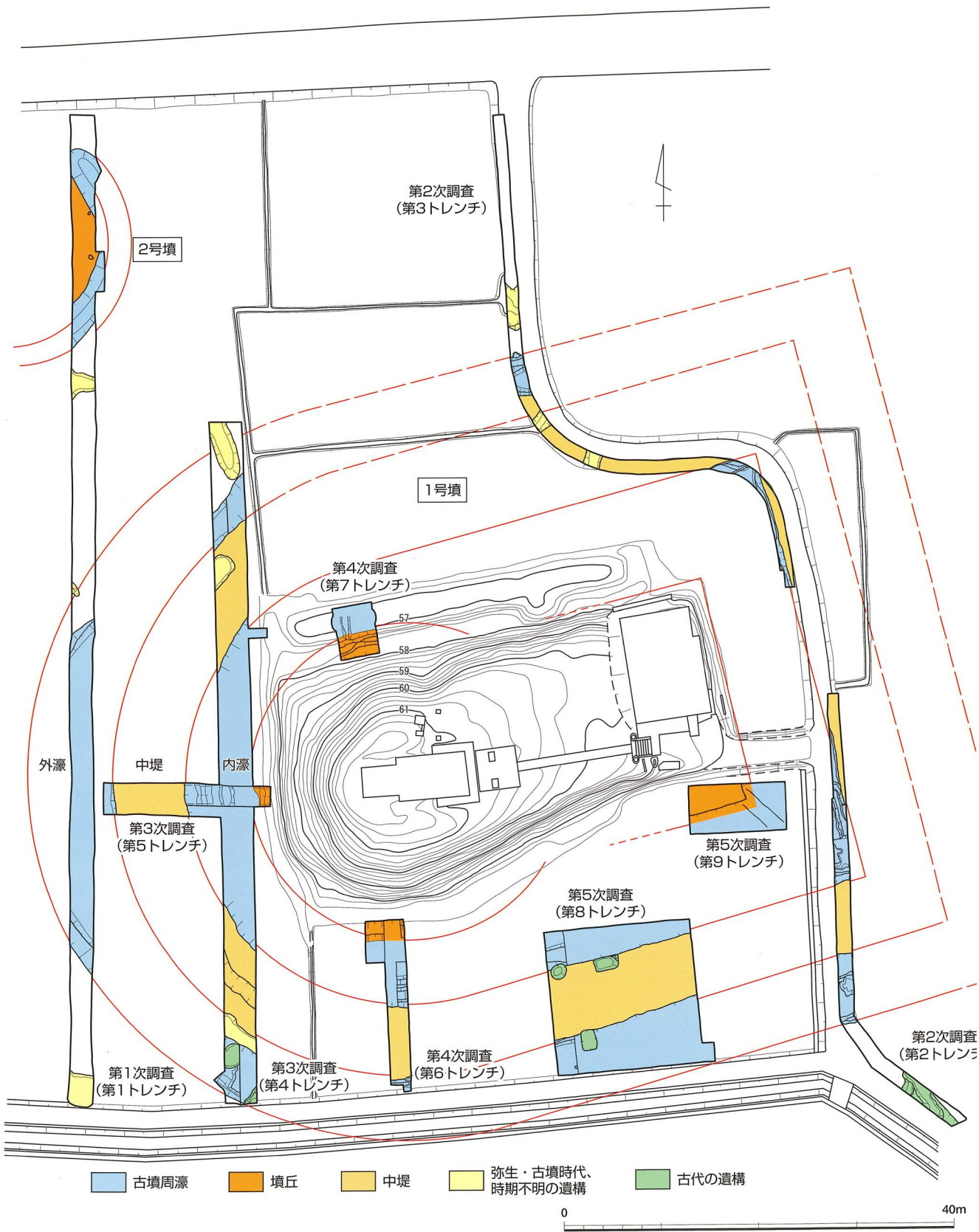


図2 笹鉾山1号墳・2号墳の地形測量図および調査地配置図 (S = 1/500)



写真2 笹鉾山1号墳全景（南から）
水田の中に高さ4.5mの墳丘を残す。周濠部分は完全に埋没し、条里制の水田区画となっている。



写真3 笹鉾山1号墳北側の現状（東から）
墳丘の北側は、幅3mほどの幅で水田面より一段低くなっており、周濠の名残りを示しているようにみえる。第4次調査では、周濠を再掘削した近世の溜池と盛土（道路状遺構）を確認した。

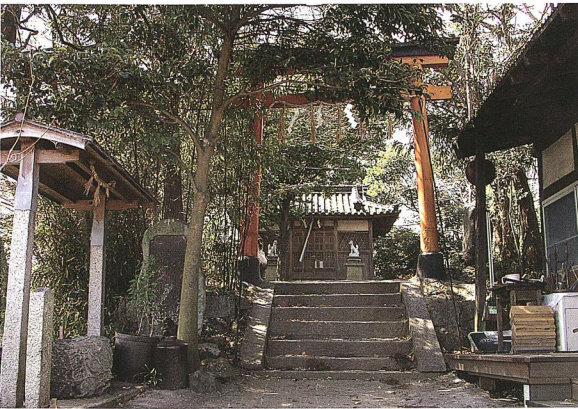


写真4 笹鉾山1号墳の前方部の状況（東から）
前方部は削平を受け、社務所（民家）が建てられている。また、神社の参道として整備されている。

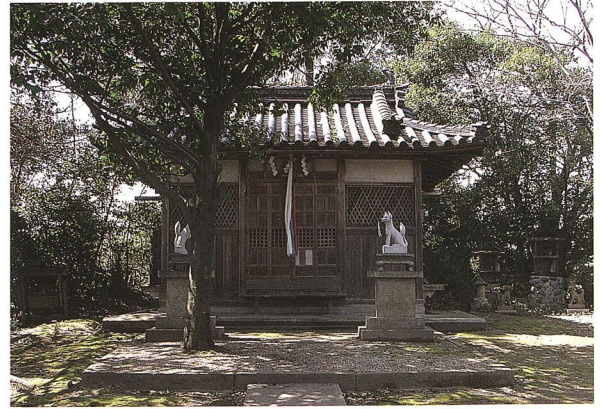


写真5 笹鉾山1号墳の後部部墳頂の状況（東から）
墳頂には、稲荷神社（通称平野大明神という）の社が建てられている。本殿の創建は嘉永5年（1852年）で、境内社に王子神社を祀る（『田原本町史 本文編』）。

第1表 笹鉾山1号墳・2号墳 調査一覧表

次数	所在地	地目	調査面積				調査期間		調査原因	担当者
			トレンチ	規模 (m)	拡張	面積 (m ²)	年度	期 間		
第1次	八尾258番1 西側水路	水路	第1トレンチ	102.5×2.2	0.9×3.8	230	平成 5年度	1994年2月14日 ∩ 3月9日	用排水路整備	藤田 三郎
第2次	八尾259番1 東側里道ほか	道路	第2トレンチ	49.7×1.2~1.6	—	163	平成 11年度	1999年11月18日 ∩ 2000年 1月18日	道路整備	藤田
			第3トレンチ	68.5×1~1.4	—					
第3次	八尾258番1 259番1	水田	第4トレンチ	71.5×3.5	1×2 2×1.8	291	平成 11年度	1999年11月22日 ∩ 2000年 2月 4日	範囲確認調査 (国庫補助事業)	藤田
			第5トレンチ	12×3.4	2.2×1.2					
第4次	八尾264番	水田	第6トレンチ	16.5×2	4.2×2 0.7×0.8	63	平成 15年度	2004年 2月 4日 ∩ 3月12日	範囲確認調査 (国庫補助事業)	豆谷 和之 清水 琢哉 奥谷 知日朗
	八尾263番		第7トレンチ	4×3.5	4×1.8					
第5次	八尾264番	水田	第8トレンチ	15×15	2×1.2	277	平成 16年度	2005年 2月 1日 ∩ 3月30日	範囲確認調査 (国庫補助事業)	清水 奥谷
			第9トレンチ	10×5	—					

第1次調査

発掘調査は、田原本町が計画した用排水路整備に伴う事前調査で、工事掘削幅に合わせて幅約2.2m、長さ約103mの南北に細長いトレンチ(第1トレンチ)を設定した。調査では2基の古墳を確認し、南側の前方後円墳を1号墳、北側の円墳を2号墳とした。

(1) 層序

調査地の現状は土水路であり、水路の土手および水路のヘドロを除去すると直ちに遺構面が現れる。また、水田にかかる部分でも、浅い所では水田耕土層(第Ⅰ層)・床土層(第Ⅱ層)下で、深い所でも床土層の下の淡灰茶色粘質土層(第Ⅲ層)を取り除くと遺構面となる。このことから調査地の大半は削平され、その後の堆積はほとんどない状況である。水田の耕土層・床土層の厚さは約0.4m、第Ⅲ層は厚さ0.1~0.2mである。遺構面は北半が灰黄色微砂層、南半が茶灰色砂礫・粗砂層で形成され、弥生時代以前の河跡堆積と考えられる。各遺構はこの面を検出面とする。

(2) 検出した遺構

第1トレンチで検出した遺構は、南半で1号墳の周濠(SD-1102)、北端で2号墳の周濠(SD-1103S・N)、この2つの古墳周濠の間で、古墳時代の土坑1基(SK-1101)と溝1条(SD-1104)、南端で時期不明土坑1基を検出した。

古墳時代の遺構

SD-1102 SD-1102は、1号墳の後円部側外濠で、延長38mにわたって検出した。外濠は、深さ約0.6mで濠底は比較的平坦である。外濠の堆積層は大きく2分でき、上層は灰褐色粘質土層、下層は灰黒色粘土層である。出土遺物は、上層下位より円筒埴輪片、須恵器・土師器などの土器片、少数の木製品が出土した。

SD-1103S・N SD-1103S・Nは、第1トレンチの北端で検出した2号墳の周濠である。発掘調査ではちょうど円墳部の東側1/3を検出した。墳丘の南側で検出した周濠部分をSD-1103S、北側周濠部分をSD-1103Nとした。墳丘部分は既に削平を受けており、まったく盛土は残っていない。周濠は北側で収束する



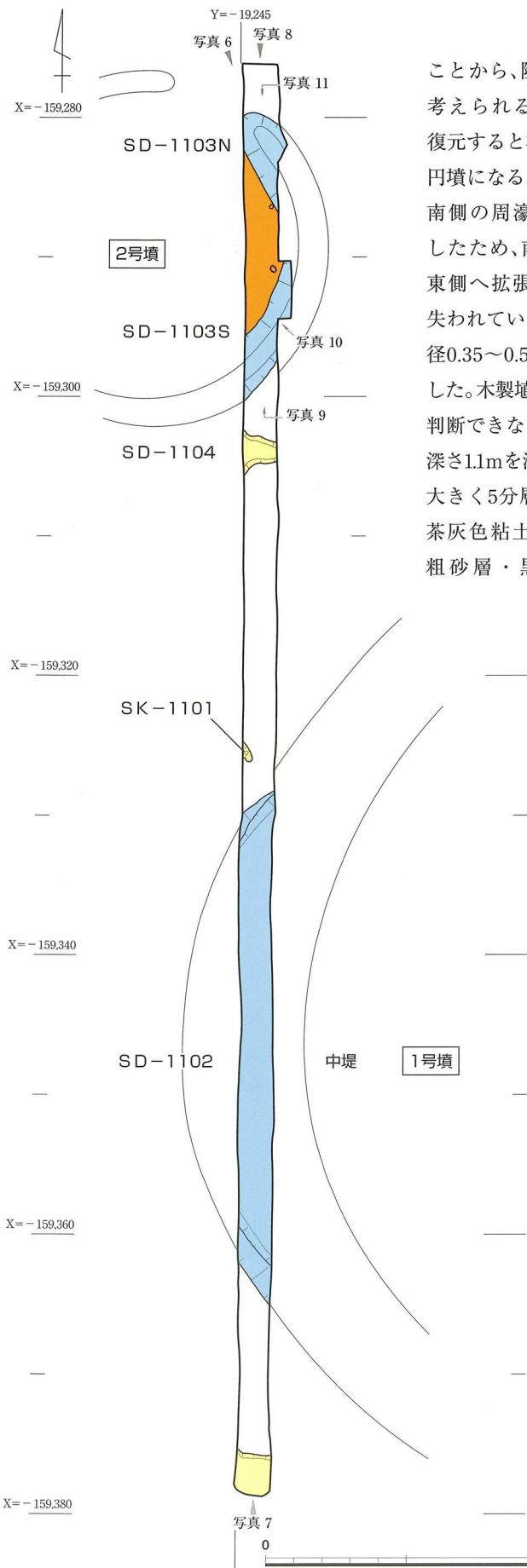
写真6 調査前の状況(北から)



写真7 第1トレンチ完掘状況(南から)



写真8 SD-1103S・N完掘状況(北から)



ことから、陸橋部をもつ円墳と考えられる。周濠の円弧から復元すると墳丘の直径約22mの円墳になる。調査の進展につれ、南側の周濠で遺物が多く出土したため、南北4m×東西0.9m東側へ拡張した。墳丘盛土は失われているが、墳端ちかくで径0.35~0.5mの柱穴2基を検出した。木製埴輪のものかどうかは判断できない。周濠は幅約3m、深さ1.1mを測る。周濠の堆積層は大きく5分層できる。最上層：茶灰色粘土層、上層：黄褐色粗砂層・黒褐色砂質土層、

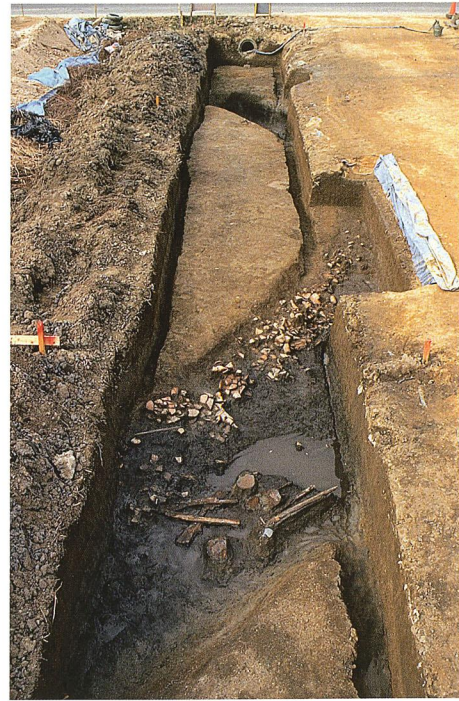


写真9 SD-1103S 遺物出土状況 (南から)

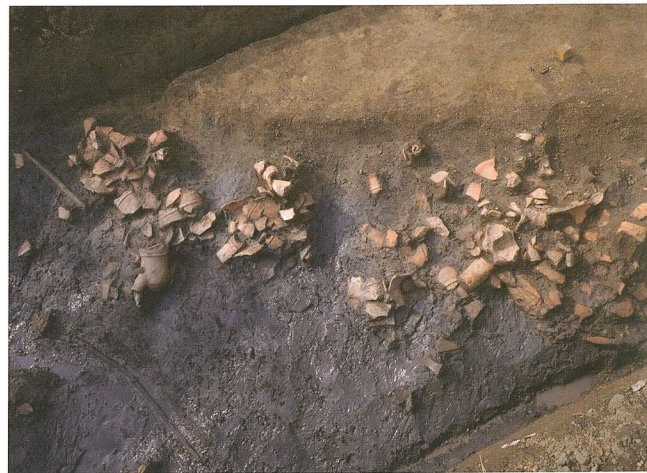


写真10 SD-1103S 遺物出土状況 (南東から)



写真11 SD-1103N 完掘状況 (北から)

中層：黒褐色粘土層（植物腐植土層）、下層：黄灰色粗砂層・灰黒色砂質土層等、最下層：灰黒色粘土層で、砂と粘土の互層堆積であることが分かる。

出土遺物は、南側の周濠SD-1103Sの上層と中層からまとまって出土した。上層では墳裾ちかくで円筒埴輪・朝顔形埴輪・形象埴輪（人物3・馬2・蓋1）が倒れて流れ込むような状況で、中層では笠形木製品・盾形木製品・不明（鳥形？）木製品などが周濠中央部分で出土した。他の層は遺物が少ないが、下層上位では不明部材の木製品や弥生土器が出土した。北側の周濠SD-1103Nは、南側に比べ埴輪などの遺物は少ない。注目されるのは墳裾に貼りつくように横木2本とそれを押さえる杭4本が墳丘斜面から出土した。墳丘の護岸施設と考えられる。

SK-1101 1号墳と2号墳の間で検出した長軸1.5m以上、短軸0.7m、深さ0.6mの不整形な穴であるが、上層から須恵器の壺が1点出土しているが、土坑の性格は不明である。

(3) 出土遺物

出土した遺物には、2次堆積物の縄文土器（晩期凸帯文）や弥生土器（後期の大型壺）、古墳に伴う土師器、須恵器、各種埴輪、木製品、石製品などがあるが、最も多いのは2号墳から出土した埴輪である。

土師器・須恵器

土師器・須恵器は、各古墳の周濠から出土しているが少ない。1号墳の周濠SD-1102では須恵器の甕内面に朱が付いたものが出土している。2号墳の周濠SD-1103S上層からは土師器の把手付甕（写真12）と小形鉢（図4-2）が、また、中層からは須恵器の坏身（図4-3）が出土した。須恵器はTK-10型式である。

形象埴輪

形象埴輪は、2号墳の周濠SD-1103Sの上層を中心に出土している。人物埴輪5個体、馬形埴輪3個体、蓋形埴輪1個体分を確認した。人物埴輪5個体のうち、全容のわかるのは2個体である。他の人物のうち、ひとつは胴部と上衣の裾の一部、右手が残っているもので、残りの2個体は右手のみである。馬形埴輪は3個体分確認したが、2個体はほぼ完存するのに対し、3号馬は鞍、障泥、脚、尻尾、杏葉などの断片のみで全容は把握できない。蓋形埴輪は、立ち飾りの軸部を中心に1個体分が上層から出土している。一方笠部は縁の部分が小片となって少量出土したにすぎない。立ち飾りには線刻が施される。



写真12 SD-1103S出土の土師器

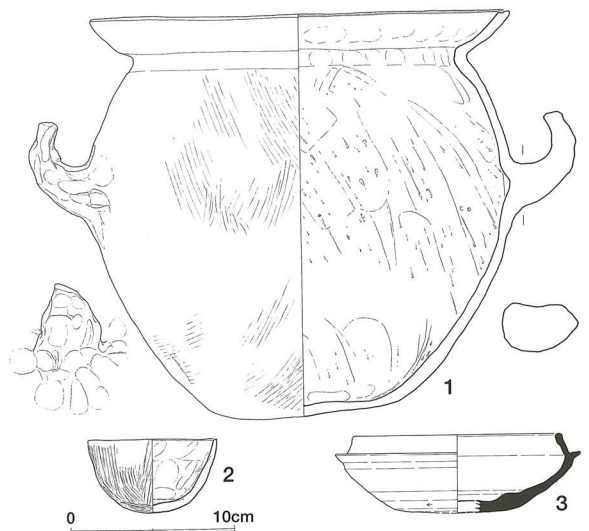


図4 SD-1103S出土の土器実測図（S=1/4）



写真13 1号人物埴輪（推定高57cm、顔の長さ12.2cm、顔の幅9.7cm）

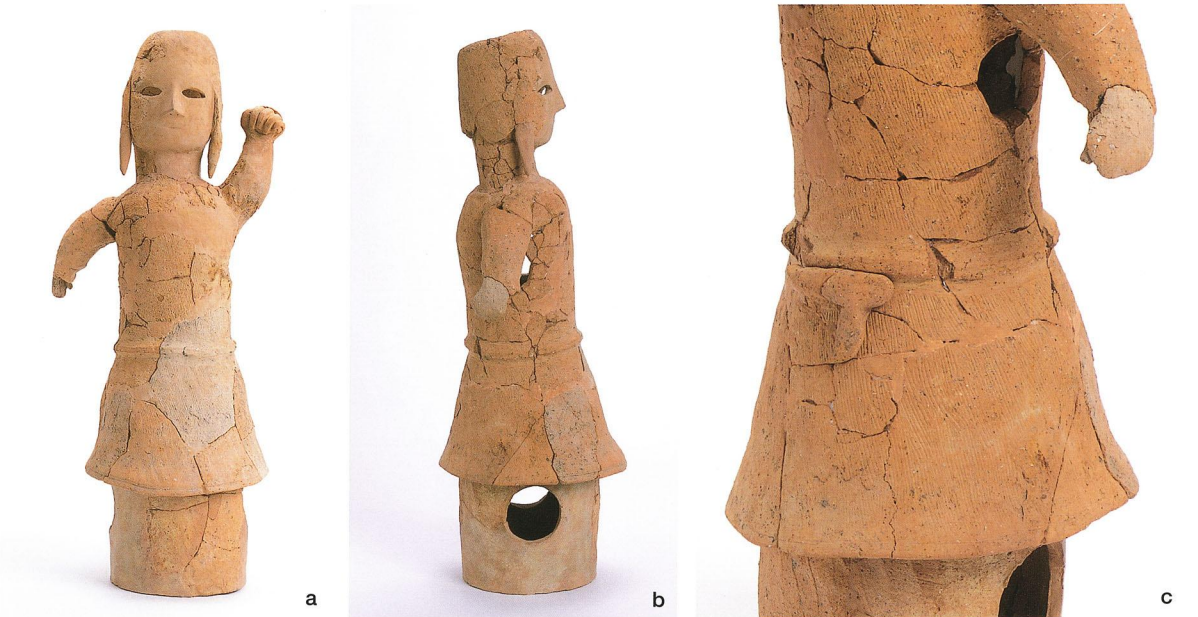


写真14 2号人物埴輪（高さ58.8cm、顔の長さ推定12.1cm、顔の幅推定10.5cm）

1号人物埴輪 1号人物埴輪(写真13)は、ほぼ全体像がわかる良好な埴輪である。左手を挙げ、右手を下げるポーズで上衣の裾まで表現しているが、脚の表現はなく、基底部の円筒が取り付け。顔は面長で、目は杏仁形に切り抜いて穴をあける。鼻は高く、鼻穴まで表現している。髪は左右と後ろに束ねた角髪であるが、後ろの部分は剥離している。ハケ目によって髪の毛を表現しているようである。顔面には入れ墨を表現した線刻がある。鼻の上には翼形、目尻から頬、あごにかけてひげ風の入墨(写真13-c)がある。これは石見遺跡などから出土している人物の入れ墨と同一である。挙げた左手は紐状のものを握っていたようであるが、剥離している。

2号人物埴輪 2号人物埴輪(写真14)は、ほぼ全体が残っているものの、頭部の破損が激しい。1号人物とほぼ同じ姿態であるが、頭部はやや角張った作りで、頭頂部は大きく穴をあけている。目や角髪、髪の毛も1号と同様の表現であるが、残っている範囲内では入墨等の線刻はない。特筆されるのは、腰部分の後側の凸帯下に粘土紐をL字形に成形した鎌を貼付していることである(写真14-c)。



写真15 1号馬形埴輪（高さ73.5cm、推定長さ85.5cm、幅21cm）



写真16 2号馬形埴輪（高さ71cm、推定長さ85.8cm、幅21cm）

1号馬 1号馬（写真15）は胴部右後側が大きく欠損するものの、全体の7割以上が残存する。やや顎が角張った顔に尖った耳とたてがみ、ふくらみをもたせた豊かな胸、蹄を表現した脚、そして、鞍など馬具を付けた写実的な飾り馬である。馬具は以下の通りである。f 字形の鏡板を付けた轡、面繫は革帯と思われる粘土を貼り付け、その交点には花形の辻金具、胸繫や鞍の敷物、障泥は線刻表現、手綱と鐙、尻繫は粘土紐貼り付けで尻には7個の鈴がつく杏葉がある。障泥は粘土板を貼り付けているが、前脚に取り付けて独立していない。

2号馬 2号馬（写真16）は、全体の9割近くが残存するが、鼻周辺が失われている。足も細片となっていたため、完全には復元できなかった。頭部の口・鼻の部分も失われている以外1号馬同様ほぼ全容の判明する良好な飾り馬である。1号馬に比べ、わずかに小さい。形態、馬具装備は1号馬とほとんど同じであるが、鞍は鐙を含めて全て線刻で表現される。胸繫は表現されていない。尻繫は粘土紐で表現される。杏葉も鈴を使用しない。たてがみ、鐙、杏葉など細部では異なる。



写真17 円筒埴輪



写真18 盾形木製品



1



2



3

写真19 笠形木製品

円筒埴輪・朝顔形埴輪

2号墳の周濠から円筒埴輪20個体前後、朝顔形埴輪は数個体分が出土している。円筒埴輪は、直径20cm前後・高さ37cmで3段のタガを有する埴輪である。タガの突出度は低い。円筒埴輪の調整は、2次調整のヨコハケ調整を施し、基底部にはタタキがみられるものがある（写真17-1）。この埴輪の底部は、面をもたず尖っており、逆さにして調整した可能性がある。しかし、大半の埴輪は、1次調整のタテハケ調整のみである（写真17-2）。

木製品

木製品は、2号墳から盾形木製品1点や笠形木製品5点、建具の一部かと思われるような板に突起をもつ木製品が出土している。この他、鳥と考えられるような不明品が1点ある。盾形木製品（写真18）は、いわゆる「石見型楯」を木製品に模したもので、縦に半分残存している。笠形木製品は、直径35cmほどの小型品で、下面の内側を削り込んでいる。笠の上部は平坦なもの（写真19-1・2）と突起の付くもの（写真19-3）の2種がある。

第2次調査

第2次調査は、1号墳の東側、つまり前方部側の道路整備に伴い実施した総延長約120mに及ぶ調査である。道路の擁壁工事部分の2工区を対象に南側を第2トレンチ、北側を第3トレンチとし、工事掘削幅を調査区とした。

調査では、2つのトレンチで中近世の素掘小溝群と1号墳前方部の内・外濠を確認するとともに、第2トレンチ南端で古代の河跡を検出した。

(1) 層序

調査地は現道路部分である。第Ⅰ層：道路整地層・第Ⅱ層：水田床土層・第Ⅲ層：暗茶灰色粘質土層を取り除くと遺構面となる。このことから調査地の大半は削平され、その後の堆積はほとんどないと考えられた。第Ⅰ層～第Ⅲ層までの厚さは約0.35mである。遺構面は北半が暗褐色粗砂層、中央から南半が黄灰色微砂・淡灰褐色粗砂層等で形成され、この砂層堆積は一連のもので最終埋没が縄文から弥生時代にあたる河跡堆積と考えられる。調査地ではその上部が削平を受けていると考えられ、第2トレンチの中堤部分は、最も良好なベースが残存しており、黄灰色微砂層の上に黄灰色粘土層が堆積する。各遺構はこれらの面より掘削されている。

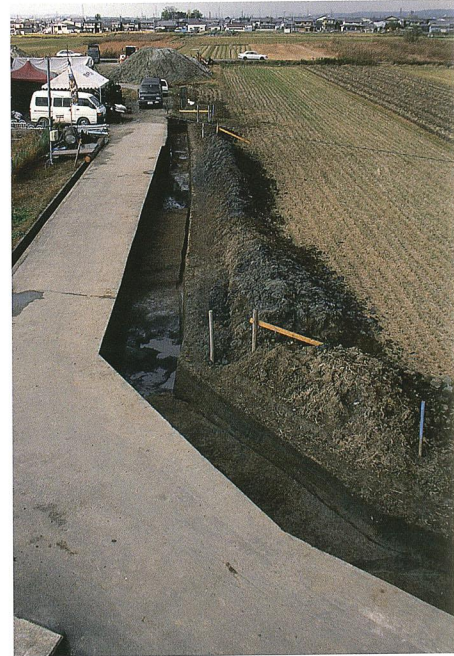


写真20 第2トレンチ完掘状況（南から）

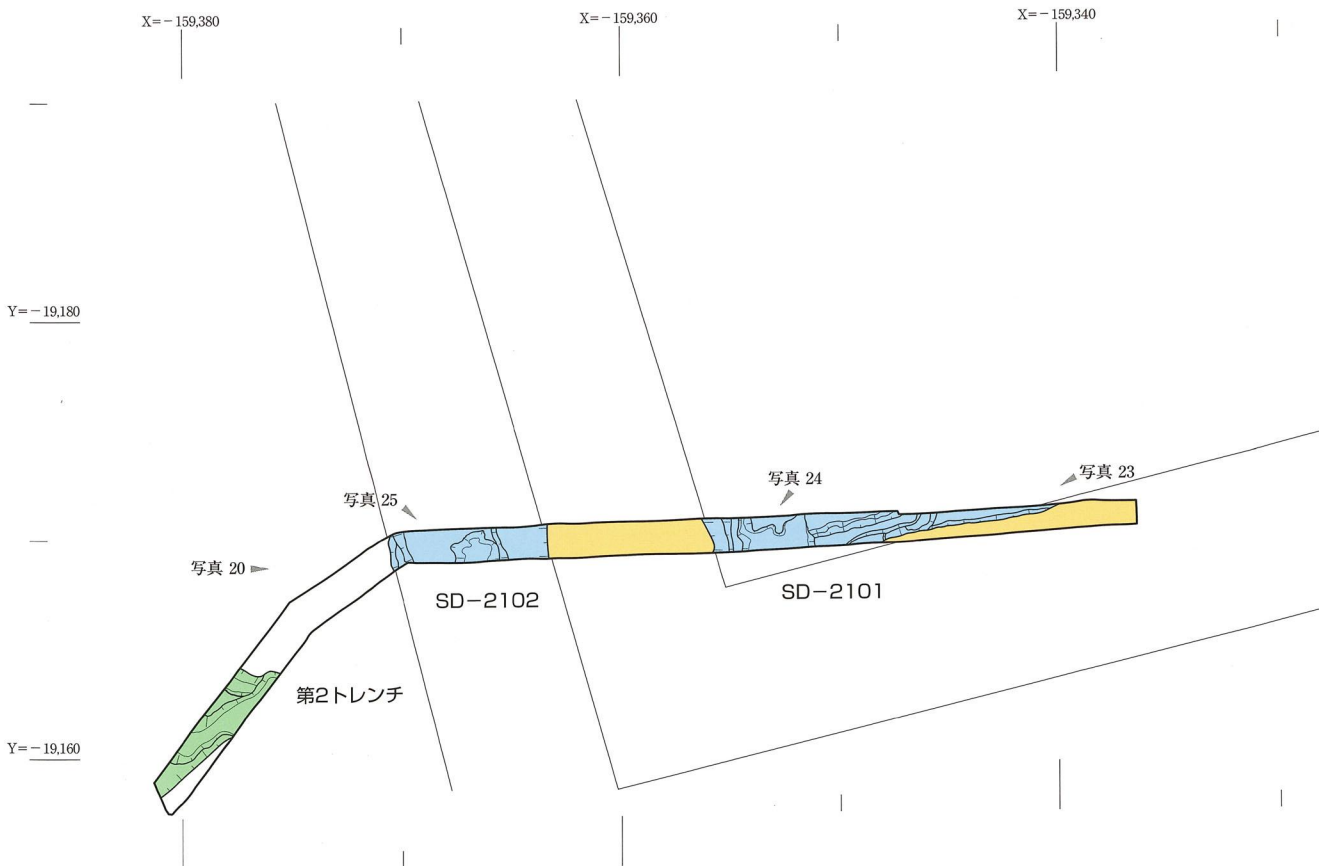


図5 第2次調査 第2・3トレンチ遺構平面図 (S=1/300)

(2) 検出した遺構

検出した遺構としては、笹鉾山1号墳の二重周濠の他、弥生時代後期末ごろの土坑、奈良時代の河跡、中近世の素掘小溝を検出した。

弥生時代・古墳時代の遺構

SK-3101 SK-3101は、第3トレンチの東西部分に掘削された土坑であるが、上部は中近世の削平を受けているため、下部の黒褐色粘質土層しか残っていない。現長1.3m、短軸2.1m、深さ0.3mである。遺物は、少なく弥生時代後期末頃の土器片が出土している。



写真21 SD-3102完掘状況（南西から）

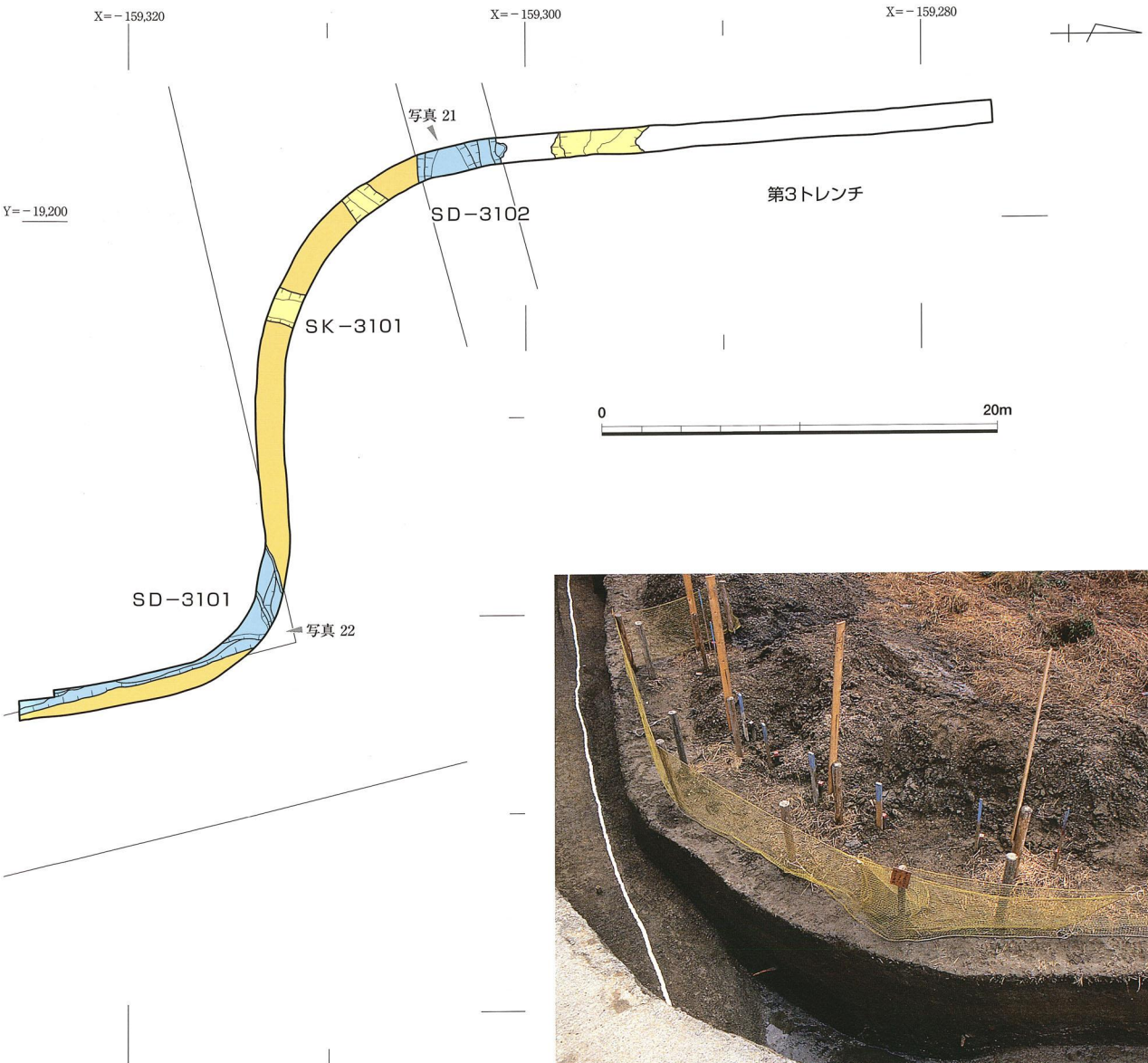


写真22 SD-3101完掘状況（北から）



写真23 SD-2101完掘状況（北から）

SD-2101・3101 1号墳の内濠を第2トレンチ北半（SD-2101）と第3トレンチ南（SD-3101）において検出した。周濠は前方部に平行するように外側肩部斜面を直線的に検出した。SD-2101では、内濠南側の外側コーナーちかくから北へ17m、第3トレンチでは内濠北側の外側コーナーちかくから南へ15mにわたって検出した。この2カ所の確認によって、内濠の外側の幅がほぼ確定し、45.2mとなった。

SD-2101は深さ0.9mで、中堤側からの砂質土の流れ込み層があるが、中央部の堆積状況は、厚さ10～20cmほどの水平堆積で大きく5分層される。上層は暗褐色粘質土層等、中層は暗灰色粘土層で緻密な堆積層、下層上位は暗灰褐色粘土層、下層下位は灰黒色粘砂層（植物層）、最下層は灰黒色粘土層である。

出土遺物は、おもに円筒埴輪で中堤側に樹立していた埴輪が倒れ落ち込んだと考えられる。下層下位の中堤側で大形破片の円筒埴輪とともに曲柄鋏や用途不明の木製品、土器が出土した。中層では奈良時代の須恵器が出土した。

SD-3101では、中堤側からの斜面部分約1m分のみ検出したため、標準的な堆積土層を示さないが、流れ込み層と灰褐色粘質土・粘土層等で構成される。遺物は、前述SD-2101同様の出土状態を呈し、中堤側から崩落した円筒埴輪や完形の須恵器坏身や土師器の台付鉢が出土している。

SD-2102・3102 SD-2102・3102は、1号墳の外濠である。第2トレンチ中央付近でSD-2102を、第3トレンチ中央でSD-3102を検出した。

SD-2102は、ほぼ東西方向に走行する形で検出した。幅7m、深さ0.6mを測る。中堤側の掘削斜面は緩やかであるのに対し、外側はやや急である。堆積土は、10～20cmほどの薄い堆積土層で4分層される。上層：暗褐色砂質土・粘質土層、中層：暗灰色粘土層、下層：淡褐色粘質土・黄灰色細砂・灰色シルトのブロック層、最下層：灰色粘土層（青灰色シルトブロック含）である。遺物は少ない。円筒埴輪片と板状木製品が出土している。

SD-3102は、前述SD-2102とは規模や堆積状況は大きく異なる。ほぼ東西方向に走行する形で検出したが、上部は削平を受けている。幅4～4.6m、深さ0.4mを測る。底面は比較的平坦で、中堤側にテラスをもつ。堆積土は、上層：暗茶灰色土層、中層：暗灰褐色粘土層、下層：黒褐色粘砂層である。遺物は少ない。



写真24 SD-2101遺物出土状況（北西から）



写真25 SD-2102完掘状況（南西から）

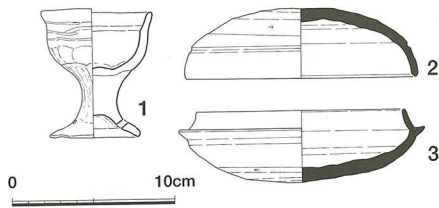


図6 土師器・須恵器実測図 (S=1/4)

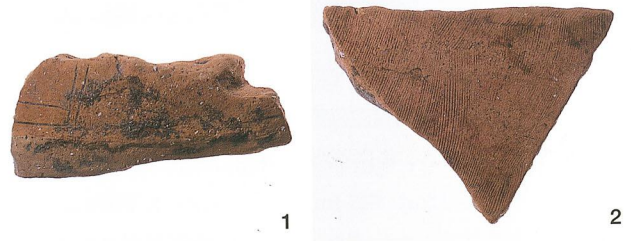


写真26 不明形象埴輪 (1:幅14.9cm、2:幅16.7cm)



写真27 円筒埴輪 (口径28cm、高さ51.5cm)



写真28 木製品 (1.曲柄鋏 全長40.7cm 2.用途不明木製品)

(3) 出土遺物

出土した遺物には、弥生土器、土師器、須恵器、埴輪、木製品などがある。弥生土器は後期末のもので、土坑や落ち込みから出土しているが、2次堆積遺物が多い。他の遺物は、大半が1号墳に伴う遺物である。

土師器・須恵器

図6-1・3はS D-3101、2はS D-2101から出土した。1は丁寧なつくりの小形台付鉢である。ミニチュア品にするほうが良いかもしれない。鉢部成形後に脚台を付加している。2の須恵器坏蓋の天井部には、ヘラによる3本線の記号が、3の坏身の底部には1本線の記号が施されている。

形象埴輪・円筒埴輪

形象埴輪 (写真26-1・2) は、小片のみで形態の判る物はない。円筒埴輪は、内濠から多く出土している。写真27は、S D-3101から出土したもので口縁部から基底部までである。5段のタガを有する1次調整のタテハケのみの埴輪である。

木製品

曲柄鋏・用途不明木製品 写真28-1・2は、S D-2101から出土したものである。1は曲柄鋏で完形品。基部は薄くなり、片側面のみ段をもつ。2は板状のもので残存長118cm、幅8.4cm、厚さ2.8cmを測るが、保存状態が悪い。側辺には長方形の穴が4ヶ所以上並んであけられ、反対側の側辺には2ヶ所抉りがつけられている。

第3次調査

本調査は、平成11年度から実施した範囲確認調査の初回にあたる。今回の範囲確認は、古墳の全長と周濠規模を確認するため、後円部側に南北71.5m、幅3.5mの第4トレンチ、東西12m、幅3.4mの第5トレンチをT字形に設定し、調査を実施した。また、後円部主軸側及び北西側張出部に2m前後の拡張区を設定した。

(1) 層序

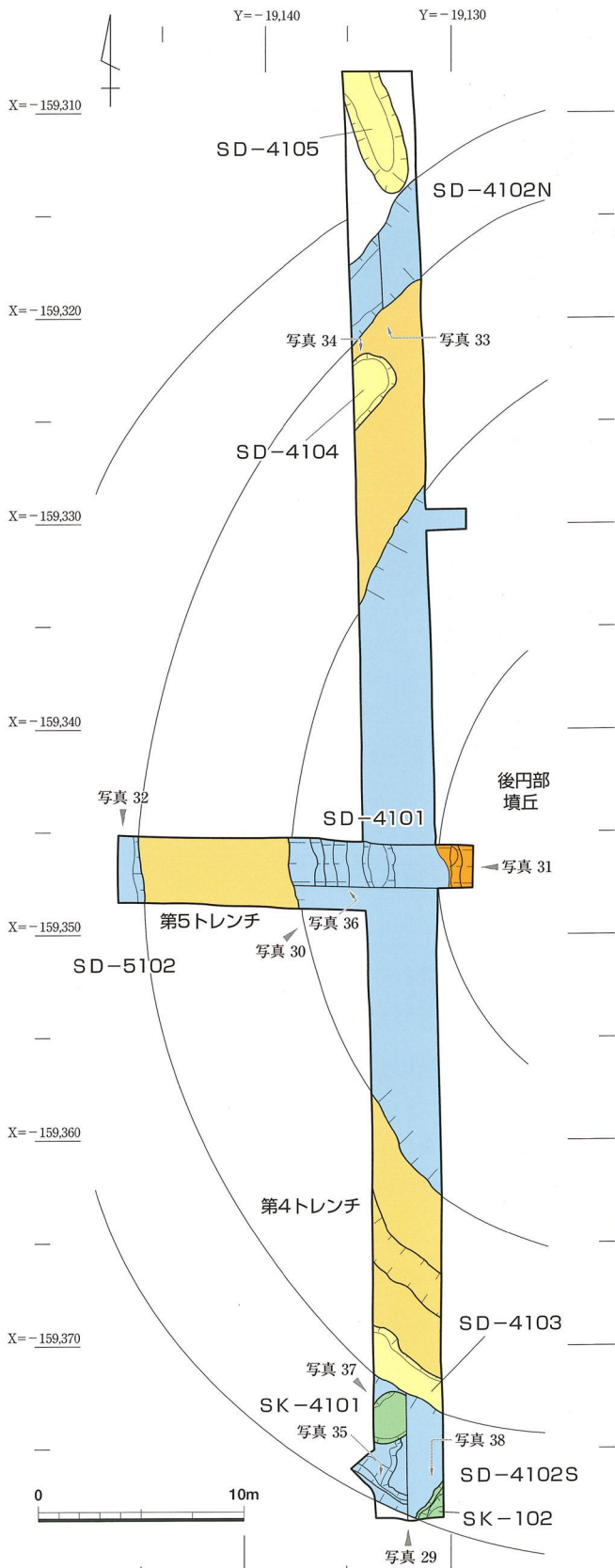
調査地は水田である。第Ⅰ層：水田耕土層・第Ⅱ層：水田床土層・第Ⅲ層：暗茶灰色粘質土層を取り除くと遺構面となる。このことから調査地の大半は削平され、その後の堆積はほとんどない。第Ⅰ層～第Ⅲ層までの厚さは約0.35mである。遺構面は北半が暗褐色粗砂層、中央から南半が黄灰色微砂・淡灰褐色粗砂層等で形成され、この砂層堆積は一連のもので最終埋没が縄文から弥生時代にあたる河跡堆積と考えられる。調査地ではその上部が削平を受けていると考えられ、第5トレンチの中堤部分は、最も良好なベースが残存しており、黄灰色微砂層の上に黄灰色粘土層が堆積する。各遺構はこれらの面より掘削されている。

(2) 検出した遺構

検出した遺構としては、弥生時代末あるいは古墳時代前期の溝、1号墳の二重周濠、奈良時代の土坑、中近世の小溝を検出した。



写真29 第4トレンチ調査状況（南から）



弥生・古墳時代の遺構

SD-4103・4104・4105 SD-4103は、第4トレンチ南端で検出した南東から北西方向に走行する自然流路状の遺構で、南肩は外濠SD-4102Sに切られている。規模は幅1.5m以上、深さ0.5mを測る。溝内の堆積は、上層：暗黄褐色砂質土、下層：淡灰褐色粘質土と灰白色粗砂のブロック層である。遺物は弥生土器小片が出土している。

SD-4104は、第4トレンチ北半で検出した北東から南西方向に走行する溝である。溝は外濠SD-4102Nにほぼ併行している。本溝の北東側は収束している。溝幅2.3m、深さ0.3mを測る。溝内の堆積は黒褐色粘質土層である。

SD-4105は、第1トレンチ北端で検出した南々東から北々西方向に走行する溝である。溝幅2.2m、深さ0.2mを測る。溝内の堆積は黒褐色粘質土層である。

SD-4104と4105は、規模がほぼ同じで溝が収束している点や堆積状況が類似していることから、一連の遺構で方形周溝墓の可能性がある。時期は判然としないが、弥生時代後期末あるいは古墳時代初頭頃と思われる。

SD-4101 SD-4101は、1号墳の内濠で第4トレンチと第5トレンチの交差するところ、つまり主軸の延長上で検出した。内濠は墳丘を取り囲むように円弧を描いていることを平面で確認した。その後、周濠の堆積状況や遺物の状況を把握するため、主軸の延長上を幅2mで濠底まで確認した。

周濠は、幅9m、深さ1.4mを測る。周濠の断面形態は、逆台形を呈し、周濠底は平坦である。堆積状況は、厚さ10～20cmほどの水平堆積で大きく6分層されるが、墳丘側は



写真30 SD-4101完掘出土状況（南西から）

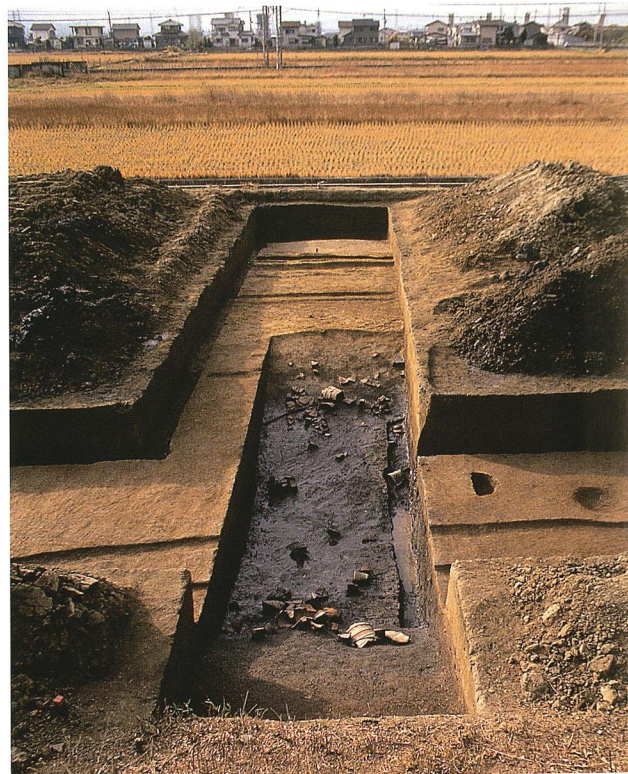


写真31 SD-4101遺物出土状況（東から）

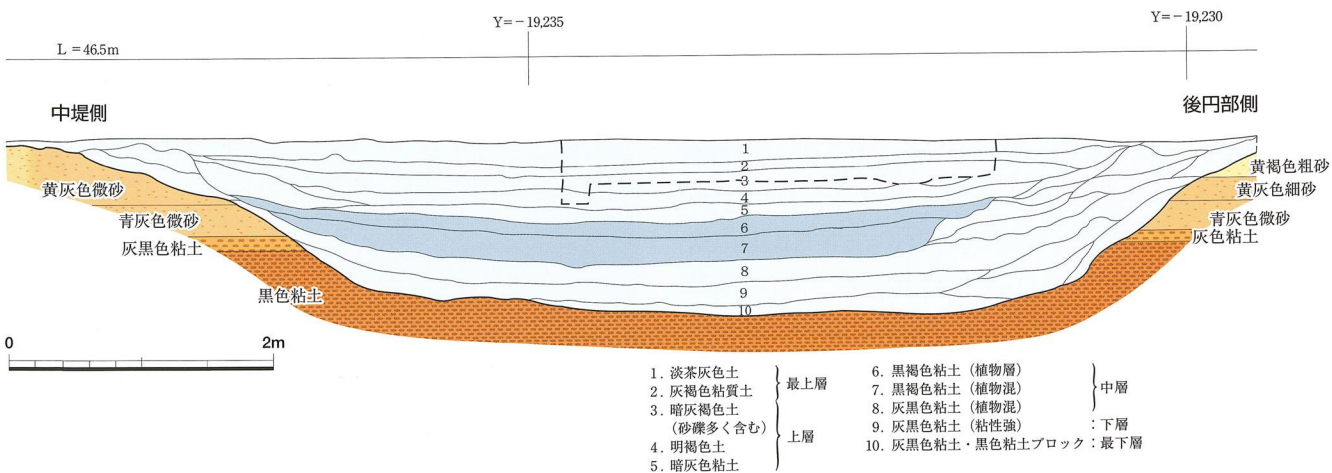


図8 SD-4101 北壁土層断面図 (S=1/50)

墳丘盛土の崩壊による流れ込み層がみられる。最上層は灰褐色粘質土等層、上層は暗灰色粘土層で緻密な堆積層、中層上位は黒褐色粘土層（植物層）、中層下位は黒褐色粘土層・灰黒色粘土層で植物を混在している。下層は粘性の強い灰黒色粘土層、最下層は灰黒色粘土層と黒色粘土層のブロック層である。

出土遺物はおもに円筒埴輪で墳丘側と中堤側に片寄っており、中央部では少ない。中層下位の中堤側で大形破片の円筒埴輪とともに刻みの入った木製品や箆が出土した。

最上層・上層では奈良時代の遺物が出土した。特に最上層の中堤側では、完形の須恵器の長頸壺や馬骨などがまとまって出土しており、周濠の埋没がこの時期にあることを示している。

SD-4102N・S/SD-5102 第4トレンチ北端（SD-4102N）と南端（SD-4102S）、第5トレンチ西端（SD-5102）の3カ所において外濠を検出した。いずれも内濠から外側に7mの地点にあり、円弧を描いている。外濠においてもその一部を掘り下げ、規模や堆積状況、遺物のあり方について調査をした。外濠の規模や堆積状況は、北側と南側では異なる。北側のSD-4102Nの規模は、幅2.8m、深さ0.3mと浅い。堆積土は暗灰褐色粘質土層で、下部は砂礫を多く含んでいる。南側のSD-4102Sの規模は、幅5.4m、深さ0.5mを測る。濠の堆積は厚さ0.1m前後で薄く水平堆積している。最上層：灰褐色粘質土層、上層：淡褐色土層、中層：黒褐色粘土層、下層：暗灰褐色粘質土層、最下層：灰黒色粘土層である。最上層は、後述するSK-101との関係から古代以降と考えられる。

SD-5102は、中堤側から1.7m分確認した。深さ0.5mである。第1次調査のSD-1102の調査を総合すると、周濠幅は北側や南側より広がるようである。濠底は比較的平坦で、堆積土は上層：灰褐色粘質土層、下層：灰黒色粘土層となる。

3カ所で確認した外濠の遺物はいずれも少なく、円筒埴輪を中心とするものであるが、その埴輪も破片で点数が少ないことから、外堤あるいは中堤に樹立されていた円筒埴輪は疎であったと推定できる。注目されるのは、第4トレンチ南端で検出したSD-4102Sの下層の土器群である。これは、外堤に並べられていたものが周濠内に落ち込むような状態で出土したもので、濠内の斜面から出土した。土器群は、おもに須恵器で壺・坏蓋・坏身の完形、半完形の甕と土師器甕を含んでいる。



写真32 SD-5102完掘状況（北から）



写真33 SD-4102N西半完掘状況（南から）



写真34 SD-4104完掘状況（北から）



写真35 SD-4102S遺物出土状況（北西から）



写真36 SD-4101須恵器出土状況（南東から）

奈良時代の遺構

SK-4101 SK-4101は、第4トレンチの南端、SD-4102Sの外濠内に掘削された土坑である。平面プランは不整形円で推定長軸2.6m、短軸2.2m、深さ約1mを測る。土坑の断面形態は逆台形を呈する。土坑内の堆積土は次のとおりである。上層は淡灰茶色粘質土、中層は灰黒色粘土や灰褐色粗砂等のブロック土の埋土層である。下層は灰色粘土層、最下層は灰白色粗砂層でベース層の流れ込みである。出土遺物は少ないが、緑釉の皿が出土していることから奈良時代であろう。土坑の形態から井戸と考えられる。

SK-4102 SK-4102は、SK-4101の南々東3mで検出した土坑である。その大半は調査区外にあり、平面プランや規模を明らかにできないが、一辺2m以上の方形プランの可能性はある。深さ0.6mを測る。土坑内の堆積土は、上層：茶灰色土層、中層：灰褐色粘質土層、下層：淡灰色粘土層、最下層：淡青灰色細砂層である。出土遺物は少なく、須恵器破片がある。土坑の性格は、SK-4101同様、井戸と考えられる。

中近世の遺構

小溝群 小溝群は、調査区全体で検出した。いずれも溝幅0.3m前後、深さ0.05mほどの規模である。小溝の方向は、4種に分類される。内濠部分では濠のラインに沿うように円弧を描いているもの、第4トレンチ北端では、その円弧にほぼ直交するものと南々西から北々西方向に走行するもの、第5トレンチでは、ほぼ南北方向に走行するものがある。いずれも中世から近世にかけての農耕用の小溝である。



写真37 SK-4101半掘状況（北西から）

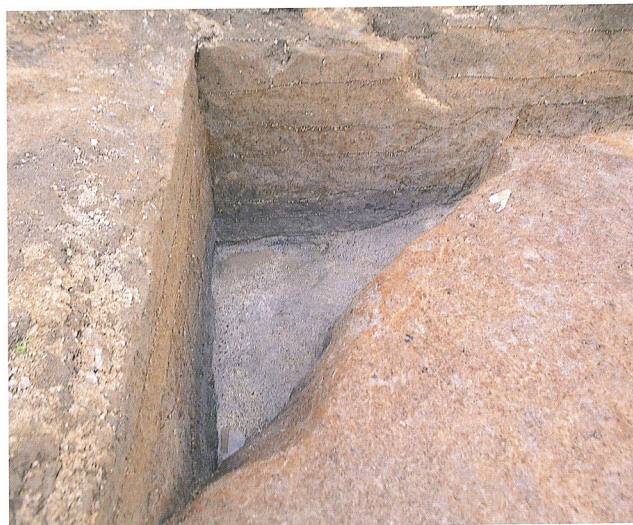


写真38 SK-4102完掘状況（北から）



写真39 須恵器・円筒埴輪



写真40 編物製品・木製品・鉄製品

(3) 出土遺物

出土した遺物には、弥生土器、土師器、須恵器、緑釉陶器、埴輪、木製品、鉄製品などがある。このうち、弥生土器は遺構に伴うものでなく、近隣弥生集落「八尾九原遺跡」のものと推定される。これを除くものは、1号墳に伴うものとそれ以降の追祭祀遺物と考えられるもの、周濠埋没過程で投棄された、あるいは井戸等の遺構に伴う奈良時代遺物に大きく分けることができる。埴輪は、円筒埴輪と形象埴輪があるが、形象は少ない。家形埴輪の堅魚木部分が出土している。

土師器・須恵器

写真39-1 (図9-1・2) は、SD-4101上層から出土した須恵器の坏蓋と坏身である。破片であるが、TK-47型式からTK-217型式のものである。

写真41-1~6 (図9-3~5) は、SD-4102S下層で出土した一括土器である。1は土師器の長胴の甕、2・3は須恵器の坏蓋・身、4は壺、5は横瓶、6は大形壺である。いずれもTK-217型式にちかいものである。



写真41 土師器・須恵器 (SD-4102S・下層)

写真42-1・2(図9-6・7)は、8世紀の土師器皿と須恵器の完形の長頸壺である。1はSD-4101上層から出土した皿で、底部には判読不明であるが、墨書がある。2はSD-4101最上層から出土した。

円筒埴輪

円筒埴輪は、SD-4101中層から大形破片が出土している。直径30cm前後、高さ55~60cmほどで、5段あるいは6段のタガを有するタテハケ調整の埴輪である(写真39-2~5)。最下段のタガは、連続ナデ技法(同-3)によるものがある。また、最上段には、「×」(同-2)や「⊗」のヘラ記号(同-4)を入れるものがある。

編物製品・木製品・鉄製品

編物製品・木製品(写真40-

1~3)は、SD-4101中層から出土している。1は笊の完形品であるが、押し潰れている。底は方形に作られている。2は鎌柄の頭部である。柄頭部の突起と上下に貫通する装着孔の一部が残存している。3は両側辺に刻み目をもつ板状の棒である。残存長12.7cm。

鉄製品 鉄製品(写真40-4)は、後円部北西側の中近世の堆積層である茶灰色粘質土から出土した。残存幅3.1cm、厚み0.8cmの断片で錆びている。実際は0.25cmほどの厚みの板状の鉄片であるが、製品名はわからない。

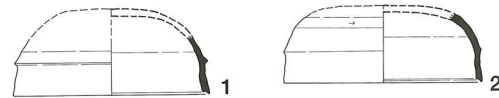


1



2

写真42 土師器・須恵器(SD-4101)



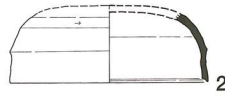
1



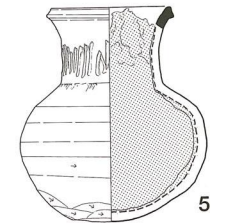
3



4



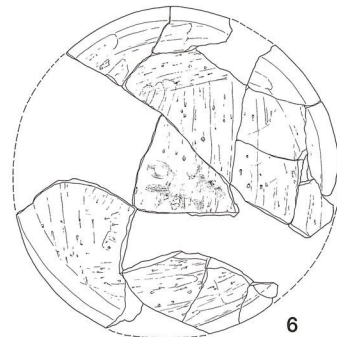
2



5



6



7

0 10cm

図9 土師器・須恵器実測図(S=1/4)

第4次調査

第4次調査は、平成15年度に実施した範囲確認調査である。後円部の規模確認のため、墳丘の南北2ヶ所にトレンチを設定した。なお、第6トレンチで内濠から須恵器群を検出したが、来年度以降に再調査することとした。

(1) 検出した遺構

古墳時代の遺構

SD-6101 1号墳の内濠で、幅8.1m、深さ1.3mを測る。堆積は大きく3層に分けられる。上層は、厚さ0.6mの褐色粘質土層等で、奈良時代の須恵器壺や土師器坏、長軸30cm前後の扁平な石、家形埴輪や円筒埴輪等が出土している。中層は厚さ0.3mの黒褐色粘質土層（植物混）で、松毬や自然木の小枝、人為的に半裁された自然木等、須恵器台付壺や大形の円筒埴輪片が出土した。下層は厚さ0.4mの黒褐色粘土層（植物混）で、遺物が極めて少ない。また、墳丘の斜面変換点に構築された間隔0.5m前後の杭列（SA-6101）を検出した。淡黄灰色粗砂である地山中に深さ0.5m前後打ち込まれていた。杭は割材で、上端は腐朽しているが幅15cm前後、長さ30~50cmが残存する。

SD-6102 第6トレンチ南端で検出した1号墳の外濠である。北肩の斜面部分のみで、深さ約0.6mまで確認した。堆積土は粗砂が中心で、遺物は少ない。



写真43 第6トレンチ全景（南から）



写真44 SD-6101遺物出土状況（東から）

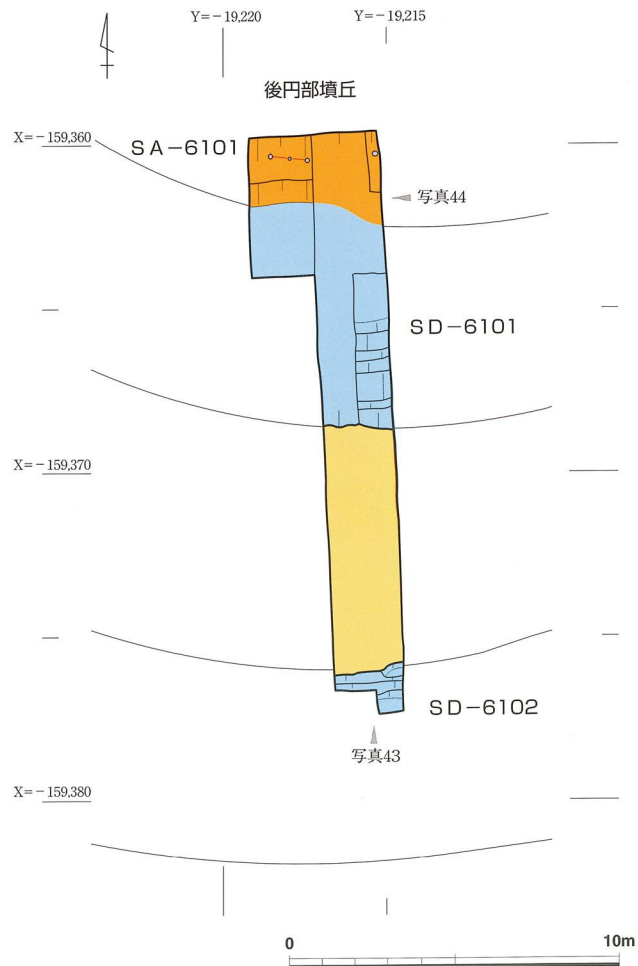


図10 第4次調査 第6トレンチ遺構平面図（S=1/200）

SD-7101 1号墳の内濠で、堆積土は大きく3層に分かれる。上層は、墳丘肩部の黒色系砂質土と周濠中央部の灰色粘土層で奈良時代に形成。中層は、周濠中央部の植物層で埴輪の大形破片とTK-10型式の須恵器坏身の完形品が出土した。下層は、砂及び粘土とシルトのブロック層である。下層では、遺物は含まず、墳丘構築直後の堆積であろう。

近世の遺構

SD-7001・SX-7001 SD-7001は、内濠部分で検出した東西方向の近世溝である。古墳周濠痕跡とも見れる直線的な落ち込みは、本溝である。溝の規模は、幅約2.2m、深さ0.9mを測る。SX-7001は、墳丘の一段目痕跡ともとれる土壇であったが、墳丘崩壊土上に厚さ約0.3mの盛土を行なった近世土壇であった。上記溝と一体のものであろう。

(2) 出土遺物

出土した遺物は、1号墳に伴う埴輪・須恵器類と内濠の埋没過程(中層より上)で、奈良時代の遺物が出土している(写真46-1・2)。1は、完形の須恵器小壺。2は土馬頭部である。頭部は扁平で、接合痕跡が残っている。埴輪は、円筒埴輪と形象埴輪がある。形象埴輪には、家形埴輪(写真45)があり、屋根から破風部分にかけての破片である。



写真45 家形埴輪



写真46 須恵器・土馬

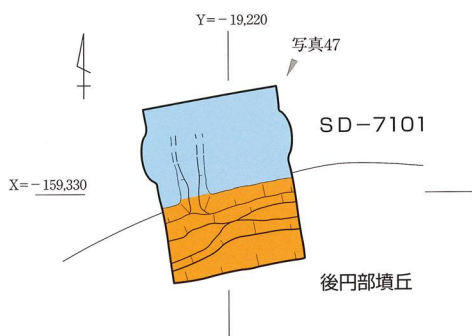


図11 第4次調査 第7トレンチSD-7101遺構平面図 (S=1/200)

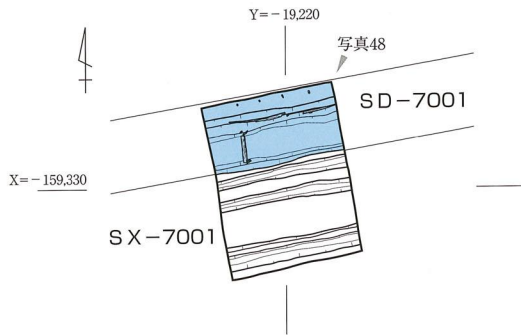


図12 第4次調査 第7トレンチSD-7001遺構平面図 (S=1/200)



写真47 SD-7101完掘出土状況 (北東から)



写真48 SD-7001完掘出土状況 (北東から)

第5次調査

第5次調査は、1号墳の南側周濠の平面的な確認と前方部コーナーの確認を目的とした。第8トレンチは南北15m×東西15m、第9トレンチは南北5m×東西10mである。なお、第8トレンチの東南隅で須恵器群を確認したため、東側へ2×1.2m調査区を拡張した。

(1) 検出した遺構

検出した遺構は、第8トレンチで古墳の内外濠(SD-8101・8102)と古代の土坑(SK-8101~8103)、中近世の素掘小溝群、第9トレンチで内濠(SD-9101)と中近世の素掘小溝群である。

古墳時代の遺構

SD-8101 1号墳の内濠で、中堤側の掘り方から北へ約1.5~4m分を確認した。堆積土層は、大きく3層に分けられる。上層は厚さ0.6mの褐色粘質土層等、中層は厚さ0.3mの黒褐色粘質土層(植物混)、下層は厚さ0.2mの黒褐色粘土層(植物混)である。

SD-8102 1号墳の外濠で、中堤側の掘り方から南へ3.7~7.5m分を確認した。推定幅8m、深さ0.6mである。濠の堆積は、上層：暗褐色土層、中層：暗灰褐色粘質土層、下層：黒褐色粘質土層である。調査区東南隅の上層、外濠の南肩斜面から須恵器大甕と短頸壺、土師器甕がまとめて出土した。



写真49 第8トレンチ全景(南東から)



写真50 SD-8102遺物出土状況(南から)

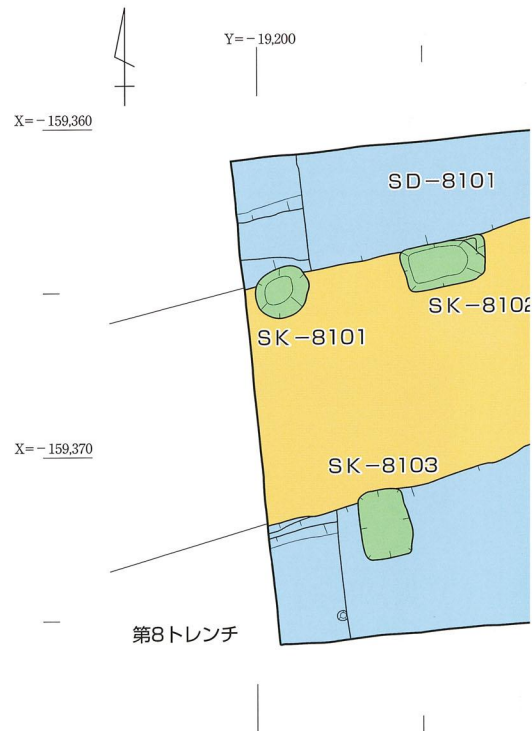




写真51 第9トレンチ全景（東から）

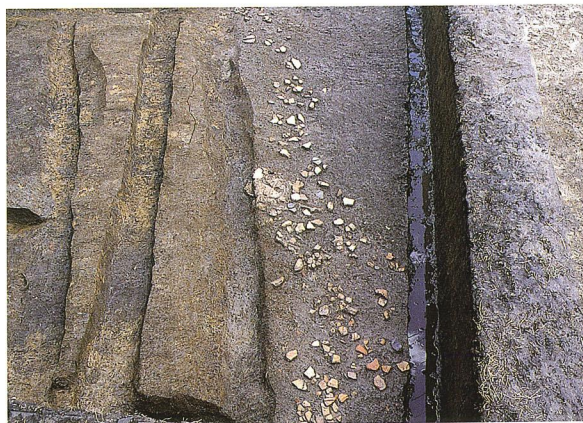


写真52 SD-9101S遺物出土状況（西から）



写真53 SX-9101出土須恵器

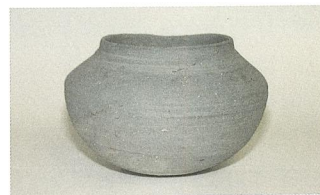


写真54 SD-8102出土須恵器

SD-9101S・E 1号墳の内濠で、前方部の輪郭を確認することができた。上層では、墳丘から崩落した円筒埴輪片が多数出土した。また、この層から「萬年通寶」が1枚出土している。なお、前方部の墳丘部分は3mほど削平を受けていたが、この部分においてベースである黄灰色粘質土を切るような落ち込み（SX-9101）を確認した。その上層から須恵器坏蓋（MT-15型式）がほぼ完形で出土した。ただし、中層や下層からは、古墳時代前期から中期ごろの土師器片しか出土しておらず、本遺構の性格、古墳の築造との関係はあきらかでない。

奈良時代の遺構

SK-8101~8103 これらの土坑は、第8トレンチの西半分で検出したもので、平面プランは円形あるいは長方形を呈する。SK-8101は、直径1.6m、深さ0.5mを測り、馬歯・土師器が出土している。SK-8102は長軸2.5m、短軸1.3m、深さ0.4m、SK-8103は長軸2.1m、短軸1.6mを測る。これら土坑の性格は不明であるが、同様のものであろう。

(2) 出土遺物

今回の調査は、周濠の平面的な確認を目的としたため、出土遺物は少なく、これまで出土しているものと大差ない。須恵器では、SD-8102の大甕と短頸壺（写真54）や、SX-9101出土の坏蓋（写真53）がある。また、奈良時代の土器類も破片であるが多い。

埴輪は、円筒埴輪のほか形態不明の形象埴輪5点出土している。

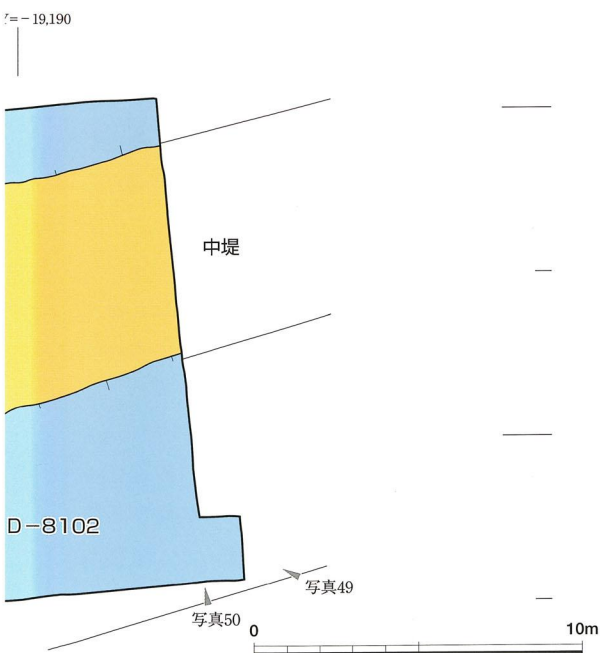
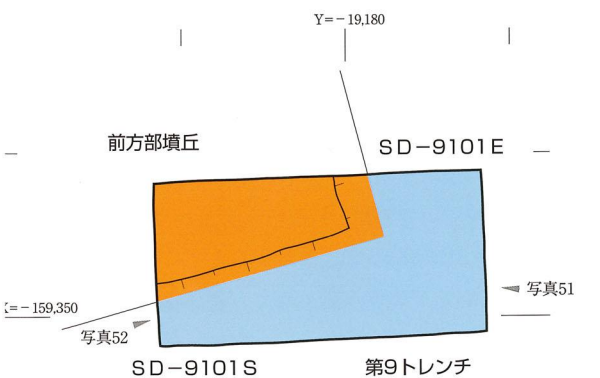


図13 第5次調査 第8・9トレンチ遺構平面図（S=1/200）

第2表 笹鉾山1号墳の規模

調査 次数	全長	墳丘 全長	後円 部径	後円 部高	内濠				中提	外濠				前方 部幅		
					遺構名	幅	深	濠底標高		遺構名	幅	深	濠底標高			
第1次	96.2	50.4	—	6.25	—	—	—	—	—	SD-1102	—	0.6	44.9	(24.5)		
第2次					SD-2101	—	0.9	4.5	7.3	SD-2102	7.0	0.6	45.25			
					SD-3101	—	—	—	11.7	SD-3102	4.6	0.5	45.25			
第3次					—	6.25	SD-4101	9	1.4	44.5	7.0	SD-4102N	2.8		0.3	45.5
											7.0	SD-4102S	5.4		0.5	45.4
											7.0	SD-5102	—		0.5	45.3
第4次					32.8	6.06	SD-6101	(9.3)	1.3	44.7	7.0	SD-6102	—		0.6	45.4
											6.16	SD-7101	—		1.2	44.6
第5次					—	—	SD-8101	—	1.2	—	5.6~ 6.2	SD-8102	(7.5)		0.8	45.4
											SD-9101	—	—		—	—

※ () 内の数値は、推定値。単位:m. ※遺構名の千台番はトレンチ番号、下3桁の101は内濠、102は外濠に対応する。

まとめ

用排水路整備の事前調査として、平成5年度に実施した笹鉾山1号墳の調査であったが、1号墳が二重周濠の古墳であることが判明するとともに、予想外にも形象埴輪が良好な状態で保存されていた2号墳を発見するという成果があった。このことは、盆地低地部にも墳丘を残す良好な古墳が存在していることを改めて認識させることになった。また、これら2つの古墳を含め、この地域一帯には削平古墳が相当数埋没している可能性が高くなり、笹鉾山1号墳を盟主とする「笹鉾山古墳群」として、これら古墳を捉えることができるようになった。

このような成果を受けて、平成11年度から1号墳の確認調査を開始し、断続的ではあるが5次調査まで進めることができたので、これまでの調査成果と課題について以下にまとめる。

- ・1号墳が築造される以前は、八尾九原遺跡として弥生時代中期後半と後期末あるいは古墳時代前期の集落遺構等が散在している。また、築造後の奈良時代には、井戸など遺構と墨書土器・緑釉土器・土馬・「万年通寶」の銭貨などの遺物が出土しており、遺跡の性格が今後、課題となる。
- ・1号墳は、地形測量と発掘調査、ボーリングの結果、二重周濠の前方後円墳であることがわかった。規模については、第2表を参照されたい。
- ・1号墳の築造時期・主体部については、現段階では不明である。時期は、出土遺物の須恵器から最も古くみると5世紀後半（TK-47型式）であるが、決定的な資料が欠けている。追葬・祭祀などを考慮する必要があるが、6世紀初頭（MT-15型式）から7世紀前半（TK-217型式）までの遺物が出土している。
- ・1号墳の埴輪には、円筒埴輪と朝顔形埴輪、形象埴輪がある。このうち、形象埴輪は、後円部に樹立されていたものが転落したと考えられる家形埴輪がある。他の形象埴輪は、小断片で形態はわからない。円筒埴輪は、樹立したものは未確認であるが、周濠内の出土状態から墳丘と中堤に樹立していたと推定できる。また、墳裾部分には、柵列状の柱穴があり、木製品の樹立あるいは何らかの施設があったと考えられる。
- ・1号墳の内濠・外濠の堆積状況は、中層に植物を多く含む粘土層があり、この層に円筒埴輪等が落ち込んでいる。この層の上部は灰色粘土層が覆っており、奈良時代の遺物が出土する。中世段階には完全に埋没し、耕地化が進み、内濠の地割りに合うような水田となった。そして、近世段階において現在の変わらない南北地割りの景観になったと考えられる。ただし、1号墳の北側の内濠は、溜池として再掘削され、近代まで残った。墳頂の社の始まりは、不明であるが、江戸時代ごろであろう。
- ・1号墳の外濠の状況は、未確認の部分が多く、今後、確認する必要がある。南側の外濠の外側では、追祭祀をおこなっている可能性が高く、7世紀前半（TK-217型式）の須恵器群がまとめて出土している。



写真55 笹針山1・2号墳 調査区全景 (写真上が北)
第2次第3トレンチ・第3次調査の写真をベースに他の調査区を貼付する

- ・2号墳は調査当初、予想もしていなかった古墳で、削平を受け水田と水路と化していた。調査から直径22m、周濠を含む全長25.7mの円墳と考えられる。古墳の築造時期は、周濠内から出土した須恵器から6世紀中頃（TK-10型式）推定されるが、円筒埴輪の所属時期も含め、さらに検討を要する。
- ・2号墳の南側周濠から円筒・朝顔・各種形象埴輪、各種木製品が出土した。これは、比較的早い段階で墳丘が崩れ、遺物が古墳の周濠内に転落したためと考えられる。
- ・2号墳は、径22mの小規模円墳であるが、多数の埴輪と木製品で古墳を飾り、形象埴輪を並べていることが判明した。これらの埴輪や木製品は南側に集中しており、南側からの古墳の見えかたを意識していたと推定できる。
- ・2号墳の形象埴輪の構成では、馬と馬を曳く人物のセットが3組もあり、他の形象埴輪があまり存在しないことから、被葬者との関係や1号墳との関係など今後、重要な課題となる。

報告書抄録

ふりがな 書名	ささほこやま こふんぐん 笹鉦山古墳群 第1～5次発掘調査概要
シリーズ名	田原本町埋蔵文化財調査概要
シリーズ番号	19
編著者名	藤田三郎・豆谷和之・清水琢哉・櫻井拓馬・奥谷知日朗
発行機関	田原本町教育委員会
所在地	〒636-0325 奈良県磯城郡田原本町926-1
発行年月日	西暦 2005年 3月30日

ふりがな 所収遺跡名	ささほこやま 笹鉦山 1号墳・2号墳・八尾九原遺跡
ふりがな 所在地	ならけんしきぐんたわらもとちようおのおおざやおおざやまもと 奈良県磯城郡田原本町大字八尾小字山本263番ほか

コード	市町村	293636	北緯	34° 33' 59"	東経	135° 47' 16"
	遺跡番号	11-A-038 11-A-074 11-A-078	調査期間	1994.2.14～2005.3.30		
調査面積	1024m ²	調査原因	用排水路整備(1次) 道路整備(2次)・範囲確認(3～5次)			

所収遺跡名	笹鉦山1号墳	笹鉦山2号墳	八尾九原遺跡
種別	古墳	古墳	集落跡
主な時代	古墳	古墳	弥生・奈良
主な遺構	二重周濠	周濠	土坑・溝
主な遺物	土師器・須恵器・ 埴輪(円筒・家形)・ 木製品(杵・鎌柄)・ 土製品・鉄製品	土師器・須恵器・ 埴輪(円筒・朝顔・ 人物・馬形・蓋形)・ 木製品(笠形・盾形)	凸帯文土器・弥生 土器・石器・須恵器 土師器・墨書土器・ 緑釉皿・萬年通寶
特記事項			

田原本町埋蔵文化財調査概要 19

笹鉦山古墳群

—第1～5次発掘調査概要—

発行 / 田原本町教育委員会

発行日 / 平成17年3月30日

印刷 / 株式会社 明新社

